

---

# マウンド。

青

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

マウンド。

### 【Zコード】

N1020A

### 【作者名】

青

### 【あらすじ】

汗と泥と涙の、高校野球に燃える高校生たちの青春物語。主人公は安藤祐咲硬式野球部のたつた一人のマネージャー。彼女はある日、かけがえのないものを失う。そしてまた、手に入れる。一度しかない青春を、一生懸命輝こうとしている高校生たちの物語。

## 第一話

今も時々思つよ。今ここに君がいたいどんなに良一だらうて

その朝、慎はいつものように走っていた。毎朝一キロのランニング。それが彼の日課である。

そしてその晩にスポーツドリンクを渡すのが祐咲の日課だった。

一キロ地点で住むの角を曲がる。

「まーじーとー。」

張りのある祐咲の声が慎の耳に届いた。慎は、祐咲の姿を認めると走るスピードを落とした。

はい、とドリンクを渡されるとスポーツ少年らしく爽やかに笑った。

「サンキュー。また後でな。」

いつも通りの言葉を交わし、慎はまた走り出した。

それが幼馴染の一人の日課だった。その朝までは。

慎が行ってしまうと、祐咲は家に戻り、朝食を食べた。その間に母親が弁当を用意し、机の上に置く。

食べ終わると、ブレザーの制服に袖を通し、髪をセットし、家の外へ出た。

いつもの様に家の前で待つ。一つ向こうの通りから、大きな部活用スポーツバッグを抱えた慎が現れるのを。

けれど、なかなか彼は現れない。祐咲が携帯電話を取り出し、時間を確認すると、七時一十分。あと一十分で校門が閉まってしまう。

「もっ、遅刻しちゃうじやん。」

慎が遅れてくるのはそんなに珍しいことではないため、祐咲が先に行くこともある。

けれど、大抵いつもギリギリまで待っている。それは、グローブを手にボールを上へ投げながら歩く慎の姿を見るのが、好きだからだつた。

それに、今日は何だか妙な胸騒ぎがする。もう行かなれば、遅刻してしまう。けれど、たまには良い。慎が来るまで待つていよう。

来ないはずがないのだから、と。

三十分になつても慎は現れない。三十五分。どうして。祐咲の胸騒ぎはじんどんどん大きくなつていつた。

通りの向こうを少し見てこよう、そう思つて祐咲が歩き出そうとしたとき、玄関の扉が勢い良く開かれ、中から血相を変えた母親が飛び出してきた。

嫌な予感が、した。

「今、電話があつて・・・慎君が・・・！」

## 第一話

結局、遅刻どころか三日間学校には行かなかつた。いや、行けなかつた。慎のいない学校へ、一人で行く気にはなれなかつたのだ。

慎が、死んだ。

「どうして・・・？」

三日間、その言葉しか出てこない。慎の母親から電話で、慎が交通事故で病院に運ばれたと聞いてすぐにその病院へ駆けつけた。

しかし、祐咲と母親が着いた頃にはもう遅かつた。ランニング中に、バイクと接触し、頭を打ちつけたらしい。打ち所が悪かつたらしく、病院に運ばれてすぐに死亡【が確認された】。頭を打つただけだから、身体は綺麗なままで、本当に眠つているだけの様だつた。

右腕を庇うようにして、倒れていたそうだ。

どうして。理屈は分かっている。バイクとの接触事故。言葉にしてしまえばたつたこれだけのことだ。けれど、違うのだ。祐咲のどうして、は。

「どうして慎が・・・どうして慎なの・・・？」

二人はいつも一緒に通つた。生まれたときから一緒に遊び、小学校も中学校も一緒に通つた。

小学校で慎が野球を始め、どんどん上達していくのが嬉しかつた。中学校では自然に野球部のマネージャーという位置についた。高校でも。

一年生エースという華やかな肩書きを背負つた慎。何の苦労もなく手に入れたと。才能のある奴は、と。散々周りに言われたが、黙つてそれを受け入れた。

生意氣だと、叩かれもした。

けれど部員は実力を見れば分かつてくれる。毎日どれだけ慎が努力しているのか。

決して才能やセンスがあるわけじゃない。

野球が好きだから、必死で、上手くなりたくて頑張つてきたことを。それでも、野球を知らない人たちからのプレッシャーはとても大きなものだつた。

そんな重責や精神的苦痛に耐えられず逃げ出しそうになつたことは何度もあつた。

そんな時、いつも慎を支えてきたのが祐咲だつた。

恋人という関係ではなかつたけれど、いつも一人で歩いてきた。祐咲の隣にはいつも慎がいた。それが当たり前だつた。そんな当たり前の日々が一瞬にして壊れてしまつた。

もう、慎が投げている姿を見ることができない。一緒に学校へ行くことも、野球を見ることも、練習することも、できない。その現実を受け入れることは、祐咲にとって余りにも過酷なことだつた。

けれど、形だけでも立ち直らなければと、祐咲は思つた。

『野球は一人じゃ出来ない。仲間がいて初めて成り立つんだ。』

慎の口癖だつた。

祐咲は？野球部？のマネージャーだ。

慎のためだけにいるわけではない。部のために尽くし、働いてきた。影の活躍者であるマネージャーは、決して日の目を見ることはないけれど、マネージャーがいなければ部が成り立つていかないことも祐咲はよく知つていた。

戻らなければ。慎がいなくても野球部は続していく。

決して強豪とは言えない野球部のマネージャーは祐咲一人だ。

祐咲がいなければ誰がドリンクを用意するのだ。誰がボールを磨き、部室を掃除するのだ。

行かなければ。祐咲は立ち上がつた。四日目の午後。丁度部活開始の時間に学校へ向かつた。

ジャージに着替え、すぐにグラウンドへ向かう。

走りこみをする一年生。ノック練習をする一年生。今は十一月。三年生はもう引退している。しばらくその光景を眺めていた。ドリンクを作った祐咲は部員たちに呼びかけた。

「みんなー！休憩しよ！」

グラウンドがざわめいた。

「安藤・・・お前・・・」

慎とバツテリーを組んでいた江崎主将が躊躇いがちに声をかけてきた。

「・・・大丈夫なのか？」

「ただの風邪ですよー。もう全然大丈夫ですー」心配かけてすみませんでした。

満面の笑顔で祐咲は答えた。何も聞いてくれるなと祈りながら。それを察したのかは分からないが、江崎は良かつたなと言つただけで、それ以上何も言わなかつた。

「おーし、十分間休憩！」

主将の声で立ち尽くしていた部員たちが集まり始めた。

祐咲は今まで通り、部員一人ひとりにドリンクを渡していく。お疲れ様と声をかけながら。

努めて明るく振舞つた。気を遣われるのだけは嫌だった。

最後の一人にドリンクを渡したとき、祐咲の手元には一本余つていた。

野球部員は全部で二十五人。慎がいなくなつた今は二十四人だ。祐咲はハツとした。以前と何も変わらず、明るく振舞つていたのに。こんなミスを犯してしまつてはその努力も台無しだ。

何も言えずにいた祐咲の手からいきなりドリンクが奪われた。

「ラッキー！俺めちゃくちゃ喉渴いててさあ。一本じゃ足りなかつ

たんだ。余つてなんなら貰うぜ。」

部のムードメーカーであり、慎の親友であつた水野だ。

一気に場の空気が和んだ。

「お前はいじきたねえなあ。」

「先輩を目の前にして、礼儀がなつてねえぞ！」

いつもの野球部が戻ってきた。遠まわしな水野の優しいフォローに、

祐咲は胸を撫で下ろした。

それと同時に、しつかりしようと自分に喝を入れた。

十分後、練習が再開され、監督と主将の指示でポジション別の練習が始まった。

いつも慎が立っていたマウンドの上には、控えの一・二年生投手が立つていて、江崎と投球練習をしていた。

慎の力強い投球を思い出し、涙が溢れそうになつた。

慎はいらない。どんなに会いたくても会えない。

(慎・・・慎・・・)

涙で目の前が霞む。

そんな姿を部員たちに見られたくないくて、そつと涙を拭いた。

そして、掃除をするために部室へ向かった。

部室の扉を開けると、予想通りの光景が広がっていた。

マネージャー不在だった三日間で、部室は随分と散らかっている。空のペットボトルから、パンの袋。

タオルや雑誌まで。これでもかと言ふくらい散らかっている。

「掃除くらいできないの、あいつらは

呆れ氣味に呟いた。

けれど、この部活に自分は必要な存在なのだと確信するのに十分だった。

丁寧に部室を掃除する。

ふと顔を上げると、壁に貼つてある書が目に入った。  
いつ誰が貼ったのかは知らないけれど、古いものだと想ひ。

紙が黄ばんでいる。

書と言つても、きっと過去野球部に所属していた誰かが書道の授業中に書いたものなのだろうけれど。

【田指セ甲子園！】

上手いとは言えないけれど、豪快で迫力のある字だ。

（そういえば、初めてこの部室に入つたとき、これ見て思つたんだ）  
頑張ろうって。

決して自分がプレイする訳ではないけれど。少しでも選手たちの力になれるように。

（頑張る！）

掃除を終えて、部室を後にする。

あと15分で部活終了。

冬のため、最終下校時刻が早いのだ。

「おーしー今日は終わりだー！」

監督の声がグランドに響き、部員が集まり始めた。  
休憩のときと同じように、お疲れをまと声をかけながらドリンクとタオルを渡していく。

「冬の間は体づくりを中心練習を組む。体力がない奴は走り込みをして体力増強を測ること。」

ハイ！と返事が揃う。

「うちの敏腕マネージャーも復活したことだしな。気合を入れていくぞー！」

監督がほほ笑みながらそう言葉を続けた。

「三日も無断で休んでごめんなさい。迷惑をかけて本当にすみませ

んでした！！」

祐咲は監督と部員たちに頭を下げた。

辛いのは、ずっと一緒に頑張ってきた彼らも同じハズだ。  
けれど、三日も休んだ祐咲を誰も責めなかつた。

監督ですら、部活の時間から來たことに対し、明日からはちゃんと朝から学校来いよと言つただけだつた。

皆の優しさが嬉しかつた。

「全くだ。この三日間、俺たちがどれだけ苦労したと思つてる？」  
江崎が口を開いた。

「部室は汚い。連絡は上手く回らない。拳句の果てに水野が作った  
ドリンクは不味くて飲めたもんじやなかつたな。」

笑いが起こつた。

皆が口々に、あれはヤバイだろ。塩だつたよな。塩分の取りすぎで  
死ぬとこだつた。

水野お手製ドリンクの批評が飛び交う。

ひでー、一生懸命作つたのに、と水野が喚いている。

「まあ、とにかく分かつたことは、俺たちマネージャーがいなけり  
や何も出来ないつてことだ。」

なさけねーキヤプテンだな。

ドリンクの作り方くらいは練習してべきだつたな。

明るい笑い声が祐咲を包む。

泣きそうになりながら笑つた。

部員たちが着替えてる間に部誌を書く。

祐咲がいなかつた三日間は、主将の江崎が書いてくれていたようだ。  
綺麗な字が綴つてある。

慎の死についても。

『俺たちは野球部のエースを。かけがえのない仲間を失つた。  
と書かれていた。

(慎、皆が慎を必要としてくれてるよ)

## 第五話

皆が着替えおわって出てくると、江崎が部室に鍵をかけた。時間は五時半だか、空は薄暗い。

祐咲は江崎から鍵を受け取り、部誌を持ち、帰り支度を始めた。

「お疲れさまでしたー」

笑つて部員を見送った。

暗くて、皆が気付かなかつたことを願つた。泣いて赤く腫れた目に祐咲が帰ろうと歩き出したとき、後ろから声をかけられた。

「安藤、待つて待つて！」

「水野？どうしたの？」

「送つてつてやるよ」

「え、何で」

今まで水野はこんなことを言つてきたことがない。

練習が延び、どんなに遅くなつても、終わると真つ先に帰ろうとしていた水野だ。

「女の子の夜道の一人歩きは危ねえじやん？」

「今まで送つてくれたことなんてないじやん。お前なら痴漢のが逃げてく、とか言つて」

「あんなあ、せつかくこの俺が送つてやるつて言つてんのに……」

「あはは、じゃあ、送らせてあげるよ」

「お前なあ！」

本当は分かつっていた。水野は、親友の、慎の代わりをしようとしてくれていると。

今まで、部活の後は毎日慎と一緒に帰つていた。

真つ暗でも、慎が隣を歩いてくれていた。

でも、もう慎はいないから。

祐咲は一人で帰らなければいけないことになる。

そこで水野が祐咲を送つて行くと言つたのだ。

一人は校門を出、もう暗くなってしまった道を歩いた。

クラスのことや、面白い先生のこと。日にちが迫ってきたテストについて会話していたが、所々話が途切れる。

会話が不自然なことに、祐咲は気づいていた。

水野がクラスの友達のことを話し、また会話が途切れたとき。

「ああさあ、」

「慎、」

水野が何か言う前に祐咲が口を開いた。

水野がずっと慎のことを話したがっていたのを祐咲は分かっていた。祐咲を気遣つてなかなか口に出せなかつたことも。

「慎ね、右腕を庇つようにして倒れてたんだって」

「！」

水野が息を呑んだ。

「覚えてたんだよ。ちゃんと」

あの約束を。

## 第六話

あの約束。

それは、夏の大会のときだつた。  
夏の甲子園を懸けた地区予選。

三年生の部員たちにとつては、最後の大会だつた。

四回戦、祐咲たちの高校は優勝候補と謳われていた高校と当たつた。  
先発したのは三年生の投手だつた。

しかし、4回の攻撃中にデッドボールが当たり腕に怪我を負つてしまつた。

そして5回から選手交代。慎がマウンドに立つた。

エースナンバーを付けた一年生。一年生と言えども、慎の実力は本物だつた。

後は頼んだ、と三年生投手は慎にたくした。  
あいつなら、きっと抑えてくれる、と皆の期待が慎に集中した。  
結果は・・・負けてしまつた。

慎はよく頑張つた。ストレートとカーブをよく操つた。  
けれど、相手強豪校の打線が、それを上回つたのだ。

三年生は肩を落とし、涙を流した。

マウンドにしゃがみ込んでしまつた慎に、三年生投手がありがとう、  
と声をかけた。

目に涙を浮かべながら。

慎は、首を横に振り続けた。

試合終了後、慎は自分を責め続けた。

先輩は、自分に全てをたくしてくれた。任せてくれた。  
その期待に応えられなかつた。

先輩たちの野球を、終わらせてしまつた。

悔しくて、自分が許せなかつた。

一人ベンチに残り、右腕で壁を殴りつけた。渾身の力で。何度も、

何度も。

それを止めたのが、水野だった。血が滲み始めた慎の拳を止め、怒鳴りつけた。

「お前、ピッチャ―の自覚あんのか！？ピッチャ―が手え傷つけんじゃねえよ！」

投手にとつて、利き腕は命だ。慎は右利きだった。

その右腕を、慎は傷つけようとした。

先輩たちの期待に応えられなかつた自分が許せなくて。情けなくて。「お前が、こんなことして何になる！？」ここで俺たちは負けた。甲子園には行けない。先輩たちはもう引退だ。

でもなあ！お前が腕壊して、そんで先輩たちが満足すると思つかる！？

負けたけど、誰もお前のこと責めねえよ！頑張つただろ！？精一杯やつただろ！？見てりや分かるよ！

負けたことは責めない。でも、お前がここで腕壊したら、先輩たちも俺もお前を許さねえ。」

そのとき、慎の目から初めて涙が零れた。

「俺たちはまだ終わりじゃない。まだチャンスがある。お前は、これからまだまだ強くなれる。

甲子園に行くんだ。お前が、全国で？一投手になるんだよ。それが、お前に全てをたくして任せてくれた、先輩たちへの恩返しだ。」

水野は慎の目を見て言つた。水野の目も、涙で赤く滲んでいた。

慎は声を殺し泣いた。

自分には、先輩にありがとうなんて声をかけてもらえる資格なんてないと思つた。

勝てなかつたから。負けてしまつたから。けれど、先輩はありがとうと言つてくれた。

抑え切れなかつた慎を、一言も責めずにありがとうと言つてくれた。

「分かつたら、約束しろ。もう一度と腕や肩を、傷つけようとするな。お前はエースだ。俺たちの大黒柱なんだよ。

反省はしても、後悔はしちゃ駄目なんだよ。  
良いか？肩と、腕だけは、ぜってえ守れ。」

慎は、深く、力強く頷いた。

それが慎と水野の、約束だつた。  
もう一度と腕や肩を痛めつけるようなことはしない。甲子園に行く  
ために。

## 第七話

「・・・」

水野は歯を食いしばつて涙が溢れそうになるのを必死で耐えていた。慎は、バイクとぶつかつたとき、とっさに腕を庇つたのだ。

恐らく、守るために。大切な右腕と、水野との約束を。

「馬鹿野郎・・・死んでも守れなんて、言つてねえぞ・・・」

「バカだよね。ほんとバカ。野球バカ・・・」

「でも・・・、慎は、きっと後悔してないと思う。いっぱい遣り残したことはあるかもしない。」

それでも、慎は毎日を、今を一生懸命生きてたと思う。だから、きっと後悔なんてしてないよ。

ただの勘だけど、でも、ずーっと一緒にいた幼馴染の私が言つんだから、間違つてないと思う

祐咲は、一言一言を噛み締めるように、言つた。自分に言い聞かせるように。

後悔なんて、残したまま逝つて欲しくなかつた。

何の迷いもなく眠つて欲しかつた。

後悔なんてしてない。そう信じたかつた。

もし、後悔しているとするならば、たつた一つ。

「甲子園、かな・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「行くよ。」

「え?」

「甲子園。絶対行く。あいつ、絶対見ててくれるから。あいつが見ててくれるなら、きっと行ける。」

皆で掘むんだ。絶対に掘んでみせる。一緒に行くんだ。慎も・・・

一緒に

「ありがとう・・・」

今日何回流したか分からない。

それでも、とじまることを知らないかのよつて祐咲の目からは涙が溢れた。

「だから、頼んだぜ、マネージャー。

お前がいないと甲子園行つても、手作りのお守りを選手全員分作つてくれる奴がいなくなるからな。」

甲子園出場チームの女子マネージャーの定番を、水野は期待した。水野らしい。

最後は笑わせてくれる。さすがは部のムードメーカーだ。

軽くて調子が良くて、真面目という言葉と正反対の水野と、いつも一生懸命で、絶対に練習や試合で手を抜かない努力の人の慎。最初は、どうして二人が自他共に認める親友同士なのか分からなかつた。

けれど、水野は、軽くて本当に調子だけは良いけれど、決して不真面目ではなかつた。

いつも凄く楽しそうに練習に取り組み、試合でピンチに陥れば一番大声を出してベンチを盛り上げる。

誰かが落ち込んでいれば真っ先に気づく。水野はいつも、仲間のことをとてもよく見ている。

慎とタイプは違うけれど、一生懸命さと野球に対する情熱は同じなのかもしれない。

仲間を誰よりも大切にする水野だから、親友を失つたことは耐えられない程辛いだろう。

それでも、水野は挫けない。慎の夢を。皆の夢を。全員で叶えようと言つてくれた。

だから、笑つた。

作り笑顔じゃなく。心から。きっと甲子園に行ける。慎も一緒に。

「慎、痛かったのかな」

水野が呟いた。

「分からぬ。でも、苦しそうな顔はしてなかつた。  
きっと・・・慎にとつては『テッドボールの方がずっと痛いんじや  
ないかな』

「そうだな。それが慎だ。」

いつの間にか祐咲の家の前まで来ていた。  
水野にお礼を言って、祐咲は家中へと入った。

## 第七話（後書き）

ジャンルは「恋愛」なのに、なかなか恋愛要素が出てこない・・・  
＜br＞恋愛ストーリーを期待して読んで下さった方には本当に申し訳ありません。＜br＞私が今書きたいことに、まだ恋愛が出てこないのです。＜br＞わざとではなく、無理矢理恋愛の話の方向に持っていくことはしたくないので・・・という理由です。＜br＞この物語には、必ず恋愛要素も盛り込んでいきます。＜br＞それまで待っていていただければ、応援していただければ、嬉しいです。

一人になり、水野は泣いた。

慎の死を知り、幾度となく泣いた。

自らの半身を失ったような、酷く苦しい思いを抱えた。けれど、水野は決して人前で涙を見せることはなかった。通夜も葬式も、部員たちの前でも、泣かなかった。

一人になつたときだけ声を枯らして泣いた。

通夜や葬式で、大声で泣き悲しむことを、慎が望んでいとは思わなかつた。

親友だから、分かる。

たとえこれが逆の立場だつたとしても、慎もきっと人前で泣くことはないだろう。

それ自身が望まないから。

(泣いてる暇あんなら練習しろよつて思つんだろうな・・・)

悲しんでいる時間があるなら練習する。

一步でも夢へ近づくために。

それが、遠い場所へ行つてしまつた親友のためにしてやれること。けれど、皆が水野のように強いわけではない。

野球部の一員を、共に汗や涙を流してきた仲間を、失つた悲しみは部を暗く落ち込ませた。

このまま部は壊れてしまふんじゃないかと思うほどに。

練習が全く手につかず、落ち込んでいる部員たちに、江崎の激が飛んだ。

「お前らしい加減にしろー落ち込んでたつて慎は戻つてこねえんだよー！」

ウジウジしてる奴はいらねえんだよー慎の死を悲しむだけか？

慎はどんなときも練習を欠かさなかつた！慎のために、頑張ろうつて思えない奴は、

野球部を、辞める。」

辞めた者は、いなかつた。

辞めるハズない。皆野球が好きで集まっているのだ。

ここで野球部を辞めたりすれば、それこそ慎は悲しむだろう。怒るだろう。

野球部は立ち直った。

安藤祐咲マネージャーが戻つてくるまでに、前の活気溢れた明るい野球部にしておこうと。

祐咲は必ず戻つてくると、皆確信していた。

彼女は、慎に負けず劣らず野球部が好きだから。

（さすがだよ、キャプテン）

主将の江崎の一聲で、元の、慎が好きだった野球部が戻ってきた。

慎も水野も江崎を尊敬していた。

あんなに主将らしい人はいない。厳しく、怖いけれど、優しい人だ。

江崎の言葉には説得力がある。

江崎が勝てる、と言えば、どんなに不利な試合にも勝てる気がしてくるのだ。

主将の力は絶大ナリ。絶対行こうな、甲子園。

水野は夜空を見上げて祈った。

そこに慎がいることを信じて。笑つて見ていてくれることを信じて。秋季大会はもう負けてしまつているから、春の選抜には出られない。目指すのは、来年の夏。江崎たちにとっては最後の夏となる。甲子園へ行く。

必死で練習するつもりだった。

もう一度と負けないと、心に誓った。

## 第九話

翌日の朝、祐咲は多少緊張しながら教室のドアを開けた。

祐咲に生徒達の視線が集中する。一瞬ざわめき、すぐに水を打つた  
ように静まった。

誰もがどう接するべきかと悩んでいたことが、手に取るようになに分か  
つた。

深く息を吸つて、

「おはようー！」

大きな声でクラス中に響き渡るようになに言つた。  
出来る限り、明るく爽やかに聞こえるように。

「お、おはよう。」

「おはよう・・・」

「やだなー！ 皆何でそんな暗い顔してんの？ あ、慎のことへあたし  
なら大丈夫だよー！？」

落ち込んでたつて何も始まらないしーー平氣、平氣！ 四日も休ん  
じやつてごめんねー？

「あ、昨日は来てたんだけどさ。部活だけ」

努めて笑顔で、明るく。皆拍子抜けしたようになに立ち戻くした。

「ち、祐咲・・・ほんとに大丈夫・・・？」

同じクラスであり、大親友の恵が恐る恐る声をかけてきた。

「大丈夫だつて！ 恵、ごめんね？ メールも電話も返さなくつてー」  
恵はその明るすぎる態度に何か思つたようだが、何も言わなか  
つた。

良かつた、心配したんだよ、と笑つた。

「ごめんねー、と笑顔で返す。

その様子を遠巻きに見ていたクラスメートたちも、いつもの朝の日  
常に戻つていった。

「祐咲、もうすぐテストだつて分かってるの？ 4日も授業受けてな

くて大丈夫?」

「・・・分かつてゐるよ。大丈夫じゃないけど、ほら、そこは恵さんの素晴らしいノートを見せてもらおうと思って」  
恵はのほほんとしていて、ぼけつとしているが、成績は学年三位という秀才なのだ。

「そう言つと思つて。はい、ノートのコピー」

呆れた顔をして恵は祐咲に束になつたコピーを渡した。

「さすが恵!! ありがとうございます!」

顔の前で両手を合わせて頭を下げる。恵が笑う。

周りの生徒も笑う。

今までと何も変わらない日常。祐咲も、クラスメイト達も、それを望んだ。

チャイムが鳴り、担任が教室に現れるとざわついていた教室は静まつた。

担任の新堂は祐咲に気付くと、田だけ微笑んで言つた。

「安藤、やつと来たのかー。全く、テスト前に休むなんてよほど自信があるんだな。期待してるぞ」

期待されても困る。今回のテストは、いつも以上に悪い自信ならあるが。

あはは、と渴いた声で苦笑した。

新堂は祐咲の欠席についてそれ以上触れなかつた。テストの話をして終わりにしたのだ。

ここにも、優しい人がいる。

テストまであと十日だ。授業を受けていなかつた分、本氣でやらないと少々危ない。

けれど、部活が休みになるのは一週間前からだ。

恵に家庭教師を頼もうか、と考えたが止めた。

一度頼んで酷い目に合つている。恵は、勉強を教えるときは有り得ないほどスバルタなのだ。

強豪チームのコーチのように。女性だが。

とにかく、人格が変わる。少しでも間違えれば罵声が飛び、手をピシャンとやられる。

何年か前の学園ドラマに出てくる、竹刀をいつも持っていて生徒を脅すのが役柄、な教師のようだ。

だから恵には頼めない。成績がズバ抜けて良い人は教え方が上手いとは限らないし。

うーん、と唸つていううちに一限目が始まった。英語だ。

祐咲は英語が得意だ。英語だけはいつもそれなりの点数がある。幼い頃だが、慎と共に英会話教室へ通っていたのだ。それが楽しく、今でも英語は好きだ。

## 第十話

それから穏やかに毎日は過ぎて行き、何事もなくテスト最終日を迎えた。

「あと一教科！」

男子生徒がシャーペンを持つて叫んだ。

最後のテストの休み時間。皆ラストスパートをかけ、教科書を開いている。

そんな中、祐咲の携帯電話がメールの着信を告げた。

「江崎先輩？」

主将の江崎からのメールだった。

“今日一時からミーティング。2 B集合。一年に連絡頼むな”  
分かりました、と返信しながら祐咲は内心がつかりしていた。

今日は部活休みの予定だったため、恵と買い物に行く約束をしていたのだ。

「めぐちゃん。ごめんなさい。今日のお買物、行けなくなっちゃった  
一年部員に連絡のメールを送ると、教科書を見ている恵に声をかけた。

「ん？ 部活？ 今日休みじゃなかつたの？」

教科書から顔を上げ、問い掛けた。

「そのはずだつたんだけど、今キャプテンから連絡入つて。ミーティングやるみたい

「ふーん。問題発生かねえ」

のんびりした口調で何げに怖いことを言わないで欲しい。

その問題によつてはマネージャーの仕事が増えるのだから。最後の教科は生物だった。

遺伝子がどうの、メンデルの法則がどうの、正直どうでも良い。

記号問題を勘に任せ、一応は最後のテストを終えた。

祐咲は窓際の席で、グランドに面しているため、自然と外を眺める

時間が多い。

テスト終了時刻までの十分間ほど、祐咲はグラウンドを眺めて過ごした。

サッカー部のコートの隣に野球部は位置している。

少し土が盛り上がったところ。ピッチャーマウンド。

祐咲の心は、不思議なほど落ち着いていた。

慎が死んでしまったことを、諦めたわけでも吹っ切れたわけでもないけれど、慎の死を受け入れつつあるのかもしない。

物思いに耽つていると、終了のチャイムが鳴った。

テストを教師に提出し、皆が騒ぎながら帰り支度を始めた。

祐咲も荷物をまとめ、ミーティングに向かうために教室を出た。

「恵、バイバイ！ごめんね！」

「今度埋め合わせしてよー」

分かつたと笑い、隣の校舎に向かつた。

2-Bの教室には、まだ三十分前なのにもう大分部員たちが集まつていた。

祐咲は水野たち一年生が座っている机に近寄り、声をかけた。

「おはよ。皆何でお昼ご飯持つてるの？ するいー」

「購買で買つてきたんだよ。」

「つーか、おはようって時間じゃねーし

冷たい突っ込み。芸能界じゃ、その日初めて会つた人にはおはようございますって言つんだから。と言つと、お前芸能人じゃねーしと言われてしまった。

「安藤、昼持つてないの？ これ食う？」

「えつ！！ 小島、良いのー？」

「良いよ。俺いっぱい買つたから」

目がクリクリした、小柄な少年。女の子にも見える可愛い顔立ちをした小島がニコッと笑つて、サンドウィッチを差し出した。

「ありがとう、小島くん、天使に見えるよー」

ははは、と小島が苦笑した。

「動物にハサを『えらいでくださいーー』

水野が言つどどっと笑い声が起こつた。小島まで笑つてゐる。

水野にはしつかり裏拳を入れておいて、椅子に座りハムサンドを食べる。

そういうひじでいる内に時計は一時を示し、教室に監督と江崎が現れた。

監督の表情は明るい。祐咲はほつとした。

テスト最終日にミーティングということもあり、内心、部員の誰かがカンニングでもしてそれがばれ、部活停止処分になつたんじゃ・・・と心配していたのだ。

だが、心なしか江崎の表情は暗い気がする。

## 第十一話

「良し、全員揃つてるな？テストお疲れさん。話はすぐ終わるからな。良い知らせだ。」

江崎も席に着くと、監督は笑顔で話し始めた。

「皆、青葉学園は知っているな？」

青葉学園。野球部の甲子園常連校だ。プロ野球選手も沢山輩出している。

今年の夏、甲子園の切符を手に入れたのも青葉学園だった。

「その青葉学園から、三学期に転入生がやつてくる。「

一気にざわついた。

「静かにしろよ。野球部員だ。一年生の、河野一志」

ざわめきは先程とは比べ物にならないくらい大きくなつた。

河野一志。青葉の一年生で唯一のベンチ入りを果たし、甲子園に出場した。

中学の頃から注目を集めていた選手だ。全国の強豪校からスカウトが来ていたと聞いた。

一年生にして、MAX142キロを出す・・・右腕投手。

「本人のたつての希望で、この成明高校への編入が決まった。野球部への入部を強く希望している。

皆、河野に負けないように練習に励むこと。以上！」

それだけ言つと、監督は教室を出て行つた。

誰も席を立とうとはせず、教室は静まり返つていた。

江崎は、監督から皆より先にこの話を聞いていたのだろう。

全国でも指折りのピッチャーが入る。願つてもないことだ。甲子園が近くなる。喜ばしいことだ。

けれど誰も、喜びの声を上げない。

「慎は・・・」

誰かが呟いた。その一言に、祐咲は震えた。

慎。成明のペッチャーは、慎だ。他の誰でもない。成明のマウンドに立つのは、大野慎だけだ。

他の者をチームのエースとして迎えることができるのか？しなければいけないことは分かっていた。

けれど・・・

「皆、複雑なのは分かるが、事実だ。青葉の河野が俺たちの仲間になる。快く迎えろよ」

それだけ言って、江崎も教室を後にした。

「何だよそれ・・・！慎の代わりなんて、快くなんて迎えられるかよー！」

水野の悲痛な叫びが、教室に響いた。「水野、落ち着けよ

「落ち着いてられるかよ！お前らは平気なのかよ！？」監督も監督だ。慎のこと忘れたみたいに嬉しそうに話しゃがつて・・・！」

水野の目は一点を見つめたまま動かなかつた。

「水野。止めとけ、言い過ぎだ。監督が慎を忘れるわけねえだろ。でも、前に進まなきやいけねえんだよ。

新しいピッチャーが、しかも青葉の河野がくるんだ。良い機会なんだろ」

「・・・」

先輩の言葉に、水野は悔しそうに唇を噛み締めた。

祐咲は初めて口を開いた。

声が震えそうになるのを必死で堪え、たつた一言。

「がんばんなきゃ、ね」

## 第十一話

震える手足を懸命に支えて、祐咲は教室を出た。頭の中は真っ白だった。少しでも気を緩ませれば泣き出してしまうそうだった。

今まで、控え投手だった先輩が投げていた。

きっと試合でも彼が正投手になるのだろうと思つていた。けれど、違う。慎の一番を受け継ぐのは・・・違う学校からやつて来る人。

天才と呼ばれる投手。

「どうして、うちに・・・」

そのまま青葉にいれば、エースは確実だつただろう。

甲子園で大活躍も出来ただろう。

何より、約一年一緒にプレーしてきた仲間たちと離れて、何故成明に来るのだろう。

（何か問題を起こしたんじゃ・・・）

悪い予感が祐咲の頭をよぎる。

高校野球はスポーツの中でも特に規則が厳しい。

何か問題が起これば、対外試合禁止、公式試合出場停止なんて当たり前だ。

もし、問題を起こして部活を退部になつたような人だつたら・・・そんな人が成明に来るのだとしたら・・・

仲間として、喜んで迎えたい。

甲子園を目指し、一緒に頑張りたい。

そうは思う。

けれど・・・

歓迎なんてできるのか。頑張ることができるのか。

水野に言つた、がんばんなきや、は自分自身に向けられた言葉だつた。

(慎、どうしよう・・・)

こんな時、慎なら何て言ったのだろう。

『ばーか。何悩んでる? 野球部への入部を希望してるんだ。野球が好きなことには変わりはないだろう。野球が好きな奴なら、一緒に頑張れるさ』

そんなことを言うのだろうな、と祐咲は思った。

今、言って欲しい、と心から願った。

決して叶うことはないけれど。

その日の夜、恵から電話があつた。

「どうだつた?」

ミーティングが、だ。何だつた? ではなく、どうだつた? と聞くのが恵らしい。

「うん…何か、三学期から、転入生がくるって」

「へえ。野球部なの?」

「青葉の、ピッチャー。一年生」

「青葉つて…あの、強いとこ?」

「そう」

何で成明にくるんだろうねえ、と昼間祐咲が思つたことと同じことを呟いた。

「それで、暗くなってるんだ? 大野君の次に立つのが、違う学校から来る凄い人だから?」

さすが、恵だ。

鋭い。いつも通りに、普通にしていろつもりだったのに、恵は「まかせない。

「・・・大丈夫だよ。うちの野球部は、皆凄く仲良しでチームワークがめっちゃ良いのが売りでしょ?」

恵の言う通り、成明の野球部はとても仲が良い。

「だから、その青葉の人もすぐに明成の野球部員に、仲間になるよ。もし天狗になつてて、馴染もうとしないような人なら、皆が受け入れない。そんな人にエースナンバーを任せたりしない。」

大丈夫。あんたの仲間を信じなよ

恵の言葉には、説得力がある。頭が良いからかな。話にちゃんと筋

が通っている。

「・・・うん、分かった。ありがとう」

## 第十一話（後書き）

12話です。<b>r</b> 読んでくださってる方、遅くなつてしまつて  
申し訳ありません。<b>r</b> もうすぐ豪腕投手が登場します。  
<b>r</b> これからも応援お願いいたします。

第十二話（前書き）

LHR=ロングホームルーム

一ヶ月後。

とうとう三学期が始まった。

冬休みは、年末年始以外はほぼ毎日練習だった。

クリスマスには部員の皆で遊び、お正月には皆で初詣に行つた。

願うことは、きっと全員同じ。

【甲子園に行きたい】 きっと。

部の結束が今まで以上に固くなつた二週間だった。

始業式の朝、祐咲は恵と待ち合わせをして学校に向かつた。

「寒いねえ・・・ほら、昨日の雪がまだ残つてるよ」

恵が指差した公園には、小さな雪だるまがいた。

「可愛いね」

クスリと笑うと、何だか胸が温かくなつた。

「きんちょーする?」

わざと平仮名で、からかうように恵が言つた。

「そりや、少しあね。でも、やつぱり嬉しいよ。速球派の豪腕投手が入るんだもん。皆もやる気になつてるし」

本当だつた。複雑な気持ちが全く無くなつたと言えば嘘になるけれど、冬休みの練習は、明らかに部員のやる気が違つた。

河野一志の存在が、皆のやる気に火をつけたのだ。

成明野球部は、この冬、強くなつた。監督はこれが狙いだつたのかもしれない。

ただ、水野だけは違つた。

皆が今日やつてくる一年生投手の存在を意識しているのにも関わらず、水野だけは変わらず淡々と練習メニューをこなしていた。

河野の話題が持ち上がりつつても、水野は決して交ざらうとしたしなかつた。水野はまだ、マウンドの上に慎を見ていた。

始業式が終わったあと、教室でのLHR。

三学期の予定表が配られ、先生の説明が続く。

河野一志はどこのクラスに来たのだろう。

少なくとも、祐咲のクラスではなかつた。

11時に解散となる。

その後野球部はミーティングが計画されていた。

河野のお披露目会だ。

廊下に出ると、隣のクラスが騒がしい。人だかりができる。

転入生、という言葉がざわめきの中から漏れ聞こえた。

「！」

祐咲の隣のクラス、1-Dは、水野のクラスだ。

よりもよって、水野のクラスに、河野一志はやつて來た……

祐咲が呆然としていると、D組の生徒たちが帰り支度をし、廊下へ出てきた。

一番最後に、水野は教室を後にして、水野の隣には、背の高い男子が立つている。

(河野一志・・・)

すぐに分かった。オーラがある。明らかに人とは違う。180cmは優に超えていて、もう長身と、長い手足。冷たそうな印象があるが、人を惹きつける力のある瞳。

「安藤、」

思わず河野に入ってしまった祐咲は、水野の声で我に返った。

「ミーティング、2-Bだよな？」

祐咲が頷くと、水野は河野を一瞥し、

「おい、行くぞ」

水野のものだと信じられない程に冷たい声で言った。

河野は何も言わず、水野の後をついて2-Bに向かった。

祐咲も一人から少し離れて歩いた。

廊下ですれ違う生徒のほとんどが河野を振り返る。

男子も女子も。

好奇の視線と、河野のオーラに惹きつけられて。

## 第十四話（前書き）

とても長い間連載をストップさせていました。  
未だに読んで下さっている方がいるかは分かりませんが、もし待つ  
ていてくれた方、本当に申し訳ありません。そしてありがとうございます。

丁度高校野球の季節ですし、頑張って書いていこうと思います。  
読んで下さったら、嬉しいです。

## 第十四話

2-Bの扉を開け中に入ると、もうほとんどの部員が集まっていた。

皆一斉に河野を見つめ、ざわついていた教室が静まり返る。

「おお、来たか。じゃあ、全員揃うまでお前はここに座つてひ

監督が、6列並ぶ机の一番前の席を指して言つた。

河野ははい、と小さくも無く大きくも無い声で返事をした。よく通りそうな低い良い声だ。

教室は静まり返つたまま、誰も何も言わない。

それが返つて空気を重くしていた。

水野は一番後ろの席に着き、河野を見ようともしない。

「水野、大丈夫か？」

水野の隣に座つている小島が小声で声をかけた。

「何が」

小島の方を見よつともせず、机の一点を見つめたまま水野は答えた。

「何がつて・・・」

小島は口ごもつてしまつた。河野と上手くやれそうか、チームメイトとして認めてやれそうか、そう尋ねたかったのだが、言えなかつた。

水野の態度が言わせなかつた。

緊迫した空氣を破るように監督の明るい声が飛んだ。

「よーし、全員揃つたな！？俺たちの新しい仲間の紹介だ。河野！」

監督に呼ばれ、河野が教壇の前に立つた。

改めて見ると、やはり凄い存在感だ。風格といつものがある気がする。

「河野一志。ポジションはピッチャーです。どうぞよろしくお願ひします。」

口調は丁寧だが、何だか心が籠つていない・・・と祐咲は感じた。

ただの妬みだろうか。監督には普通に聞こえたようだ。

「今日は顔合わせだけだから、河野を入れての練習は明日から始める。皆、気合入れて来いよ！」

監督が教室を後にして、誰も立ち上がりひとつしない。

怖いほどに空気が張り詰めている。

一番前の席に黙つて座り外を眺めていた河野に、最初に声をかけたのは意外にも小島だつた。

「・・・の。」

「・・・え？」

「え？ ジゃないよ！ よろしくって言つてんのー俺、A組の小島勇太！ ポジションはファースト！」

もう一度よろしくな、と言つて小島はニコニコ笑つた。

「ああ・・・よろしく。」

緊張してゐるのか、元々無口な性格なのか・・・。

河野は言葉少なでニコリともしなかつた。

小島がきつかけとなり、主将の江崎が自己紹介を提案した。一人ずつ、名前とクラスとポジション、そして一言を言つていぐ。よろしくと言う者が多かつたが、中には趣味や好きなタレントの名前を出す者もいた。

和やかなムードのまま水野の番になつた。

「水野亮。D組。キヤツチャー。」

それだけだった。一瞬だけ冷たい空気が流れたが、自己紹介はそのまま進んでいった。

今年は正捕手は江崎だらうから、河野とバッテリーを組むのは江崎だが、投球練習はもちろん控え捕手もする。

江崎が出られない場合は水野が出ることもあるだらう。

大丈夫なのだろうか、と祐咲の胸は不安でいっぱいだつた。

そういうじでいる内に、自己紹介は全員回り、最後に祐咲の番となつた。

「1年C組、安藤祐咲です。マネージャーなので、雑用は何でも言いつけて下さい。よろしくお願ひします。」

言い終わって座ろうとしたとき、河野が口を開いた。

「・・・あんたが、マネージャー？」

祐咲は突然のこと驚きながらも答えた。

「え、うん、そうだよ。分からぬことがあつたら何でも聞いてね。」

「ふーんと言つて祐咲を見た。だがすぐに興味を無くしたかのようにな  
河野は顔を逸らした。

「悪いけど、用事あるんで帰ります。」

河野は江崎にそう告げると、荷物を掴み教室を出て行つてしまつた。  
全員、呆気に取られたかのように静まり返つた。

「な、何というか・・・マイペースな奴だな・・・」

江崎が言つと、水野が口を挟んだ。

「つーか、感じ悪すぎっすよ。」

余りにも冷たい口調に江崎も驚いたようだが、すぐに冷静に水野を  
諭した。

「お前な、気持ちは分かるけど、クラスメートだろ？来年はお前が  
河野とバツテリーを組むんだ。そんなんでどうする。」

「俺は、あんな奴とバツテリーなんて組みませんよ。あんな偉そ  
な奴の球なんて取りません。どーセリードにも首振つてばつかじや  
ないすかね。」

「水野、いい加減にしとけよ。」

有無を言わせぬ江崎の口調に、水野も黙つた。

「・・・俺も、今日は帰ります。」

そう言つて水野も教室を出て行つた。

江崎はため息をついて、祐咲に言つた。

「安藤、頼む。」

祐咲ははい、と頷くと荷物を持って水野の後を追つた。

## 第十五話

1階の下駄箱で水野に追いついた。

「水野！待つてよ！送ってくれるんじゃなかつたの？」「はあ？まだ明るいだろ。」

「良いじやない。途中まで一緒に帰ろ。」

祐咲はそう言つて水野の隣に並んだ。水野は黙つたままだ。

「水野。感じ悪いよ。」

祐咲はハツキリと言つた。

「お前が勝手に付いて来たんだろ！？」

「違うよ。さつきの自己紹介。あんな言い方じやみんなの雰囲気まで悪くなるでしょ。」

水野は何も言わない。

「嘘でも、よろしくべらり言つべきよ。江崎先輩の言つ通り。これから大丈夫なの？」

この後、水野の口から悪い掛けない言葉が飛び出した。

「俺、野球部辞めるから。」

祐咲の頭は真っ白になつた。

河野の悪口は出ても、まさか辞めるなんて言葉が飛び出すとは思わなかつた。

「・・・何、言つてるの？」

「本氣だから。あんな奴がいる野球部なんて、やつてらんねえよ。」

水野は、冷たい目をしていた。

「ちよつと待つてよ！甲子園行くつて言つたじやない！慎が見てて

くれるから、絶対一緒に行くんだつて言つたじやない！」

「その慎を！・・・慎の死をあいつは・・・残念だったなつて吐き

捨てたんだ！」

祐咲を睨み付けたその瞳には、怒りの色が宿つていた。

教室で、水野は河野から

「ここにホームースだつた奴つて事故で死んだんだろ？」  
と聞かれたらしい。

そうだと答えると、河野は全く表情も変えず、たつた一言残念だつたなと言つただけだつた。

「慎の死を、そんな一言で片付けられて！黙つてられるかよー・あんな奴と野球なんて出来るかよー・」

甲子園なんて、目指せるかよ・・・・・・

祐咲は、何も言えなかつた。

ただ黙つて立ち去くしていた。

「辞めるから。」

もう一度言つて、水野は祐咲を残しその場を立ち去つた。

どうして。

どうして辞めるの。

どうして河野はそんなことを言つたの。

どうして水野は、頑張らうぜつて言わないの・・・

ねえ慎、どうしよう。

水野が辞めちやうよ。

あんなに野球が大好きだつた水野が、慎の親友が、辞めちやうよ。

だけどあたしには、止めることが出来ない。

あんな悲しい目をした水野を、止めることなんて出来ないよ。

どうしよう、慎・・・

その日の夜、祐咲は江崎に電話をした。

水野のフォローが出来なかつたことを詫びて、辞めると言つたことを伝えた。

「・・・そつか。」

「あの、キヤプテン・・・」

「分かつてゐる。あいつに辞められたらみんなが困る。大丈夫だ。辞めさせたりしない。」

祐咲は幾分かほつとして電話を切つた。

けれど、あの水野の瞳は・・・決心が固いことを物語つていた。

水野が腹を立てるのは、よく分かる。

祐咲だつて慎の死を残念だつたで片付けられたら、黙つてなどいられない。

別に泣いて悲しんで欲しい訳じゃないが、みんなに愛されていた大

野慎という偉大なエースに、興味を持つて欲しい。

勝手な言い分かもしれないけれど、祐咲はそう思わずにはいられなかつた。

きっと、水野もそうだつたのだろう。

どんな投手だつたと聞かれれば、彼はきっと惜しみことなく慎について熱く語つたであろうから。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1020a/>

---

マウンド。

2010年12月21日15時02分発行